

終戦から72年が経ちました。

朝起きたら小雨が降っていました。スマートフォンのお天気アプリによると、最高気温が27度、どんより曇った一日でした。たいした雨ではありませんが、降ったりやんだり中途半端なお天気でした。

8月15日。ここ5年くらい前からこの日を少し意識する日になった気がしています。年齢を重ねたせいでしょうか。多くの尊い命を奪った残酷な戦争が終わった日です。昨年 commons センターで行われた“歴史カフェ”で、飯吉理事長・総長先生からお話を頂きましたが、1945年8月14日、政府はポツダム宣言を受諾し、翌15日の正午、昭和天皇による玉音放送によって日本が無条件降伏したことが国民に伝えられました。これにより第二次世界大戦が終結したのです。戦死者は約212万人、空襲による死者は約24万人だったと内務省より発表されています。1963年から毎年、政府主催による「全国戦没者追悼式」が行われ、正午から1分間、黙祷が捧げられています。この時期は全国高等学校野球選手権大会（通称：甲子園）が行われていますが、甲子園でもサイレンと共に黙祷が行われるので、知っている学生も多いと思います。

先日、池上彰の戦争を考えるSP⑨～「特攻」とは何だったのか～と言うテレビ番組を観ました。元特攻隊員らの貴重な証言から、死を覚悟で敵に体当たりする究極の攻撃がどのようなものだったのか、戦争の真の姿が伝わってきました。そして昨日、NEWS ZERO を観ていたら、“終戦後生き残った兵士たちの心の傷”が特集されていました。ある兵士の経験談が紹介されていました。この元兵士の方は、銃剣で人を刺す訓練や兵士の遺体埋葬など過酷な任務に携わり、終戦後“うつ病”と診断されました。凄惨な記憶は、今なお、残っているそうです。白骨死体の現像だけはバツと思出し、今でも葬儀に行くこと恐怖で手が震えて骨が拾えないと話されていました。私はこの話を聞き、心的外傷後ストレス障害なのだろうと考えるに至りました。

さらに、兵士たちの心の傷について、静和会浅井病院に貴重な資料が残されていることが紹介されました。精神疾患の兵士8002人分の病床日誌（カルテ）です。苦しむ兵士の様子が克明に記されている内容が紹介されていました。これまで戦争の悲惨さは、資料や映像で知る機会がありました。しかし、兵士の方々の心の傷を私は病床日誌（カルテ）と言うものを通して知る事になり、私は人々の健康に対する保健・医療従事者、医科学研究者を育成している者の一人として、考える機会をもらいました。



前にも書きましたが、この日を迎えると、戦争を意識します。その理由の一つと考えられるのが、一冊の本にあります。その本は”小泉義秋遺稿集 —ビルマ戦線を生き延びて—”です。小泉義秋氏が経験した戦争の記憶を、若い世代へ伝える貴重な歴史的証言です。前編第三章の見出しに、「軍隊は運隊とよく言われますが、私の六年八か月の軍隊生活は、命が五つも無ければ通過できなかったものを、一つで済ませて今なお生きているのだから、四つは運の神様の助けがあったお陰だと、今もって有難く感謝しています」と書かれています。この本を読むと、戦争によって多数の尊い命が犠牲になり、多くの人々が様々な形で苦難に満ちた人生を歩むことを強いられることがわかります。

“歴史カフェ”で、飯吉理事長・総長先生からお話を頂いたと紹介しましたが、飯吉理事長・総長先生は昭和天皇による玉音放送をお聞きになっておられます。実体験のお話を聞かせていただいて、戦争は教科書や歴史上の話のように感じてしまいがちですが、実際に体験した方からお話を聞かせるということは、それだけ最近のことであると実感しました。

6月30日から7月2日にかけて、秩父宮賜杯 第70回西日本学生陸上競技対校選手権大会（通称：西日本インカレ）が広島広域公園陸上競技場で開催されたため、広島に滞在しました。滞在したホテルから広島広域公園陸上競技場に向かうバスに乗車するため、バスターミナルに広島駅から路面電車で移動したのですが、バスターミナルから徒歩数分で原爆ドームがあることがわかりました。幸い、7月2日（日曜日）の午前中、中部大学の選手が出場する試合が無かったため、原爆ドーム、資料館、平和記念公園を訪問しました。約45年生きて来ましたが、原爆ドームを訪問したことが無く、初めての訪問となりました。

原爆ドームをはじめ見て、感情が複合的に入り混じる、これまでにあまり経験したことのない気持ちになりました。気がついたら、スマートフォンで写真を撮影していました。原爆ドームを後にして、平和公園へ向かい、平和の鐘や原爆の子の像を拝見しました。平和の鐘を鳴らし、戦争の犠牲になったすべての皆様のご冥福をお祈りしました。次に資料館に入りました。資料館には、広島歩みと、広島に原爆が投下されることになったかの歴史などが写真とともに説明されていました。また、原爆の恐ろしさを物語る被爆者の遺品の数々もありました。今回、学生3人と共に訪問しましたが、資料館を出る際、様々な感情を話しました。私を含めた4人は、自分がいかに平和な日本に生きているのかを実感していました。

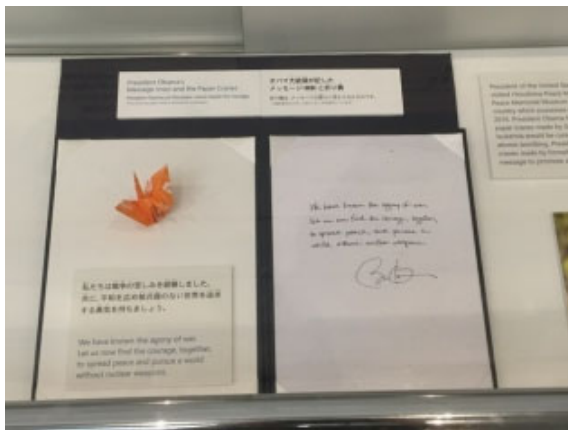
資料館の展示で特筆すべきは、折り鶴です。2016年5月27日に第44代アメリカ合衆国のバラク・オバマ大統領が訪問した際に持参された折り鶴です。「私たちは戦争の苦しみを経験しました。共に、平和を広め核兵器のない世界を追求する勇気を持ちましょう」と記されて

おり、花柄模様入りの和紙で折られた折り鶴が置かれていました。終戦から71年、オバマ大統領が現職の大統領として広島を訪問したことは歴史的な出来事で、感慨深いものがありました。

今月のメッセージは、繊細な内容で、テーマとしてふさわしいかどうか考えましたが、個人的には伝えたい内容だったため、書かせてもらいました。紹介した書籍の著者、小泉義秋は私の祖父です。祖父は戦争のことをほとんど話してくれませんでした。しかし、生き残った戦友と「ビルマに行く」と、幾度も訪れていたことを思い出します。訪問の際、リュックに酒やタバコを詰めていた姿を思い出し、その気持ちをこの本を読むことで分かった気がしました。その祖父も2011年6月に90歳7か月の生涯を閉じ、他界しました。祖父が1946年7月に広島県の大竹港に生きて復員しなければ、私はいなかったかもしれません。平和な日本で暮らせていることに改めて感謝し、世界平和を祈りたいと思います。

最近、時々本メッセージを「読んでいます」とお知らせいただくことがあります。大変光栄なことですが、反面恥ずかしい気持ちになっています。コモンズセンターを利用する学生たちに向けたメッセージですが、中部大学を志望する高校生や、中には小学生に読んでいただいているとの情報もいただきました。皆さん、有意義な夏休みをお過ごしのことと思います。特に、高校3年生の受験生の皆さんは勝負の時だと思います。暑い時期なので、体調管理に気をつけてください。

コモンズセンター長 伊藤 守弘



オバマ大統領の折鶴



学生と記念撮影